

芸が受け継がれるとき

～ 現代インド社会における儀礼パフォーマンスの実践者たちと世代間摩擦 ～

竹村 嘉晃

(人間科学研究科人類学講座)

1. 問題の所在

本研究は、南インド・ケララ州北部のヒンドゥー教徒を中心に行われている儀礼パフォーマンスのテイヤム*Theyyam*を事例に、現代インド社会における宗教的実践の価値をめぐる諸相をフィールド調査から明らかにしようというものである。

祭礼や民俗芸能、舞台芸術などの身体文化は、時代とともに衰退し、やがては消えてしまうものもあれば、時代状況による何らかの契機で隆盛を極めるものもある。これまでの研究では、こうした身体文化の衰勢に関して、社会変化や審美的優越といったあいまいな言葉が論じられ、社会のどのような変化が身体文化の存続に影響するのか、美的価値判断の基準とは何なのか、身体文化それ自体もまた社会とともに変化せざるをえないのかなどについて、十全な説明がなされてこなかった。

テイヤムを取り巻く社会環境に目を向けると、独立以降、共産党イデオロギーの浸透や土地改革によって、儀礼を維持する社会的基盤が大きく変容してきた。1990年代以降では、国内の経済発展や中東湾岸諸国の出稼ぎ労働者からの送金のもと、儀礼自体が再活性化する一方、テイヤムを取り巻く状況は様々なイデオロギーが錯綜し、その価値付けが多様化している。こうしたなかで、儀礼実践に関する芸がどのように受け継がれ、新しい世代の実践者たちがどのような価値観を生成しているのか、伝承の営みにおける世代間の摩擦とそれを乗り越えようとする担い手たちの営みを検証するのが本研究の目的である。

2. 調査概要

期間：平成21年8月12日～9月2日

調査地：インド・ケララ州のカンヌール県カンヌール市及び周辺、カーサルゴッド県カーサルゴッド市とカニャンガード市

調査内容：テイヤム儀礼の担い手たち (*Vannān* コミュニティの親子3組他) への聞き取り調査
儀礼主催者、寺院関係者、タラワードゥのトラスト・メンバーへの聞き取り調査
Kerala Folklore Alademiでの資料収集及び関係者への聞き取り調査
インド人民党 (以下、BJP)、インド共産党マルクス派 (以下、CPI(M)) の政党関係者・党員への聞き取り調査

地元研究者 (M. Dasan教授：Kannur University、A. K. Nambir書記：Kerala Folklore

3. 調査上の問題点と解決策

身体技法 (*kalāsam*) に関する世代間の相違を考察するための実演撮影が困難

→ 当事者とその家族、参拝者などの語りをもとに分析、過去に記録した映像資料の活用

4. 調査成果

今回の調査から、以下のような知見を得ることができた。

(1) 消滅から再活性化へ

1970～80年代に伝承が危惧されたテイヤム儀礼が経済発展を背景に再活性化

恥ずべきものから誇りへ、テイヤムに対するまなざしの変化

ムッタッパン儀礼の隆盛による若年層の担い手たちの参入

(2) 伝承基盤の変容と主催者側の意向

「よいテイヤム」を求める儀礼主催者、稼働域の拡大とその弊害

スケジュールの調整、儀礼実践の簡易化、託宣への比重が増大

祭礼的要素を強める(楽器編成の増大、爆竹、花火、ダンス、ステージ・ショー etc)

(3) 伝承の脆弱化

強権的な指導の衰退と不十分な学習過程、基盤となる身体訓練が未習得

化粧や衣装作りに関するワークショップ (*Śilppasāla*) の定期的な開催

実践機会の増加、報酬のよさ、学校からのドロップアウト

(4) 古典的教養の欠如

学校教育のカリキュラム変更により古典的教養を学ぶ機会を失う

託宣 (*vāchal*) の内容が理解困難(担い手・参拝者)、託宣の簡易化

(5) 地元の政治的状況

左翼勢力が根強い地域、CPI(M)とBJPの衝突

人々の支持を得るための思惑、「われわれ」の慣習と「ヒンドゥー」の伝統という正当化

(6) 担い手たちの意識

信仰心、技量、政治的背景に関する世代間の相違

儀礼空間における「ふるまい」、テイヤムの装束・装飾に対する価値観のずれ

「ジャーティ」としての役割から生計を営む「職業」へ

5. 今後の課題

担い手たちの語りから浮かび上がった身体技法に関する世代間の相違について、過去に記録した映像資料と照合し、その動作分析をすすめる。

儀礼の隆盛による伝承の変容として単に論じるのではなく、インド経済の発展というマクロな問題を、儀礼の実践とその担い手たちの社会・生活環境の変化の次元において、個人がどのような物語として語り対応しているのか、収集データから紡ぎとっていく作業をすすめる。